

犬インフルエンザ

Canine Influenza

犬インフルエンザは2004年に発見された比較的新しい病気です。以前は犬はインフルエンザウイルスには感染しないものと考えられていました。発見されたのはアメリカ合衆国で、2006年7月現在日本での発症報告はありません。

原因

原因である犬インフルエンザウイルスは馬のインフルエンザウイルス2型と同じH3N8亜科です。馬のインフルエンザウイルスがどうして犬に感染するようになったかは今のところ不明です。

感染は咳やくしゃみなどによる呼吸器分泌物への接触により起こるとされています。潜伏期は通常2～5日です。犬種、年齢に関係なく感染し、ウイルスに暴露された犬は100%感染するそうです。

症状

軽症の場合、10日から1ヶ月ほどの湿った咳をします。また二次感染により膿のまじった鼻汁を排泄します。ほとんど感染犬の場合は軽症型となります。

重傷になると突然高温を発生し、咳、出血性鼻汁、呼吸促迫(早い呼吸)や努力呼吸といった肺炎症状を起こし、出血性肺炎などで死亡することもあります。今のところ致死率は5～10%程度とされています。

診断法

現在のところ犬インフルエンザを一般の動物病院で確定診断できる方法はありません。基本的には症状等から推測するしかなく、その症状はケンネル・コフという病気と非常に似ているためにアメリカなどではしばしば間違えて診断されるようです。

治療法

特定の治療薬はありません。他のウイルス性疾患と同様に対症療法と輸液や栄養補給、二次感染に対する抗生物質の使用などがその主なものです。

罹患率100%との報告もあるので隔離施設のない病院での入院は不可能と考えます。

自宅での看護法

自宅では、指示された薬剤をきちんと投与し、栄養補給、安静にするなどの看護が必要と思われます。

予防法

犬インフルエンザを予防するワクチンはまだ開発されていません。

罹患に対する予防法はドックショーなど犬の多く集まるところを避ける。これは犬だけでなく人が付着物により媒介することもあるので注意が必要です。またインフルエンザウイルスは60℃、30分の加熱や一般的な4級アンモニウム塩、塩素系消毒剤で簡単に殺ウイルスできるのでケージや食器、使用器具などの消毒を徹底する事を心がけましょう。

メモ

今のところ日本での発症は報告されていませんが、アメリカから犬の輸入も多い事ですし、現在の検疫体制などからすると一つ日本で発症してもおかしくないと考えられます。また現在のところ主にドックレース場での感染が多く見受けられますので犬を飼育している人は海外渡航時になるべくそのような施設に立ち入らないほうがいいかもしれません。念のため人への感染は報告されていません。



[広告] ▲上記QRコードで携帯から簡単アクセス可能..